

春の伝道礼拝第3回 (5月31日)

愛されていた

相武台教会 山口 和憲牧師



創世記

1章1〜5節

ヨハネによる福音書 15章5〜10節

今日このような場を与えてくださった荻窪教会の方々、そして主なる神に感謝いたします。

私のキリスト教との出会い

初めに、キリスト教との出会いについてお話しします。小学校3年生の時、学校から帰ると、母と外国人が話をしていました。おそらく初めて肉眼で見る西洋人。金髪で目が青くて鼻が高い女性。キリスト教の宣教師で、アメリカ人の女性でした。母が近所の教会が行なっていた料理教室に通っていて、キリスト教伝道の一環として各家庭を訪問していたのだろうと今となっては思います。

キリスト教とは、縁のない家で育った私は、そこで初めて母に連れられて教会に足を運ぶことになりました。教会名は平岡福音キリスト教会、札幌市にあります。シン

ガポール人、香港人、韓国人、アメリカ人の宣教師がいる国際色豊かな教会でした。それでも、礼拝出席は20名くらいの小さな教会で普通の家に十字架をつけたような建物でした。それからというもの、母と妹と、毎週日曜日に教会に通うことになりました。父も時折、教会の礼拝に参加しました。それが私たち家族の日常となりました。ですから、何か大いなる決断があつてとか、自分を変えたいと思つたから、というのではなく、母に連れられて、というのが私と教会、そしてイエス・キリストとの出会いでした。毎週休まず教会に通いました。本当に休まずです。信じるとか、信じないとか、よく分かりませんでした。とにかく休まず通いました。そのうち、母が洗礼を受け、キリスト教徒になりました。浴槽を使つてのいわゆる

る全浸礼のスタイルだったので、どこか子どもながらにインパクトがあつたことを覚えています。

教会学校に休まず通い続ける

教会では教会学校で、子どもたちが集められ、聖書のお話を聴きました。教会員の子どもが5名くらいだったと記憶しています。紙芝居で見た聖書の物語が自然と頭に入ってきます。聖書にはこんなことが書かれている、このように話が進んでいく、ということが分かりました。

中学校2年の時に、父の転勤の都合で函館市に引っ越ししました。近所に教会があり、そこに通い始めました。函館栄光キリスト教会という教会です。そこも、礼拝出席20名くらいの小さな教会でした。毎週、妹と二人だけの教会学校でした。私はそこでも教会に休まず通い続けました。部活動は日曜日が休みでしたから通うことは難しいことではありませんでしたし、教会に行くことは自分にとって嫌なことではありませんでした。も

ちろん行きたくない日もありましたが、それを言うとう母に怒られてしまう、母が悲しんでしまう、また、教会の人たちが悲しむのではないかと思っていました。

イースターに洗礼を受ける

ある日、教会の人から、洗礼を受けようかという勧めがありました。母の洗礼を見ていましたから、洗礼を受けるとキリスト教徒になることは知っていました。イエス・キリストの十字架と復活を信じてはいたと思うのですが、洗礼というと、少し気が引けました。するとその人は「迷いながらもいいんじゃないですか。神さまは和憲君を愛していますよ」と私に言いました。その言葉があつて、洗礼を受ける決心が着きました。そして1998年のイースターに洗礼を受けました。

つまり私は、こちらは何も期待していないのに、何も求めていないのに、ふとした時に、イエス・キリストに出会い、洗礼へと導かれたということです。イエス・キ

リストとの出会いは人それぞれです。神の存在を求めて、安らぎを求めて教会に通い、洗礼を受ける人もいます。私のように、ある意味では偶然に神に出会った人もいます。でも、私はその偶然を神の導きだと信じたのです。

ぶどうの木の御言葉から学ぶ

与えられたヨハネ福音書の少し前から見てみたいと思います。

「わたしにつながつていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる」(2)。1節の「わたしはまことのぶどうの木」という宣言に続いてすぐ、このような厳しい警告が発せられますが、続けて主の慰めと励ましの言葉が語られます。「しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くされている」(2-3)。

よい実を結ぶように、自分で一所懸命、清くならなければならぬと思ふかもしれませんが、そうならなければ、自分は切り捨てられるのだろうかと不安になるかも

しません。しかし、主イエスは「わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている」(3)のだと、言ってくださいました。命令以前に、事実として、そういう宣言されたということです。

「わたしにつながつていなさい。

わたしもあなたがたにつながつている」(4)。私たちに呼びかけると同時に、主イエス自身がそのように私たちに手を差し伸べておられる。そういう姿勢がよく表れているのではないのでしょうか。「あなたがたはその枝である」(5)という宣言と「わたしにつながつていなさい」(4)という命令は、一見矛盾するように思えます。しかし、その表現は、信仰の本質を突いていると思います。イエス・キリストはぶどうの木として、わたしたちに関係を持ち、私たちがひとりひとりをその枝として結び付けてくださる。しかも、それを自分から積極的に言われる。それは確かな事実です。

しかし、私たちは、そのことを受け止められず、それを見失い、離れて行ってしまいます。私たち

自身がそれを認識していなければ、実際には離れているのと同じ状況になってしまふのではないのでしょうか。「従っていく」という呼びかけへの応答が伴っていないければ、本当に「聴いた」「信じた」ということにはなりません。

ですから私は、このように命令と宣言が同時に語られる時に、そこには、私たちに、「本来的な自分に帰れ。イエス様が何をしてくださったか。そしてそのイエス様の言葉の中に留まり、その愛に生きる道なのだ」と言っているように思うのです。私たちは、信仰をもつて生きる時に、どこまでも、このまことのぶどうの木から離れることができないということを、わきまえておかなければなりません。

信仰生活に卒業はない

信仰生活が長くなりますと、もう立派なキリスト者だから、ひとり立ちできると思うかもしれませんが、ところが、信仰ということについて言えば、それはありません。その、まことのぶどうの木、先生

であり、友と呼んでくださるその方から、一歩離れてしまつては、もはや信仰とはいえないのです。

ですから教会で私たちが信仰生活を続けるということには、卒業はありません。私たちは、しばしばそれを見失い、忘れてしまいますが、そこへいつも立ち帰って行くようにということが促されているのではないのでしょうか。

そして、主イエスは続けられます。「あなたがたが、わたしにつながつており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすれば、かなえられる」(7)。

求めているものがそのまま与えられるということではありません。主イエスこそが、私たちに本当に何が必要であるかをご存知であつて、私たちが求めているものとは違った形で、あるいはそれを超えた形で、答えられることがしばしばあるのです。また私たちが求めている時に答えられるとは限りません。時を延ばされて、違った時に答えられるということもあり

(7頁の続き)

ます。最もふさわしい時に、最もふさわしい形で、(それは時に私たちの期待に反するような形で)、答えられるのではないでしょうか。

「わたしの愛にとどまりなさい。わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる」(9-10)。

この言葉は、二つのことを指し示しています。一つは、私たちがこの愛を受けて生きていることをいつも思い起こしなさいということです。イエス・キリストこそが愛であることを忘れないようにしなさい。それが「わたしの愛にとどまりなさい」ということの第一の意味です。

もう一つは、「あなたもその愛に生きよ」「あなたもその愛に生きていきなさい」ということです。主イエスご自身が示してくださいましたその愛をあなたたちも生きなさい。それがまことのぶどうの木につながる枝として、私たちに求め

られていることです。

人は愛されていることを知った時、前を向くことができる

洗礼を受け、時間が経ってから気づいたことがあります。私はたくさんの人たちに愛されていたということでした。家族、友人、教会の人たち。その出会いの一つ一つに神がおられました。そして教会は私にとって居心地のよいところでした。私は教会へと様々な人たちの助けがあつて、そして神の助けがあつて私はここまで歩んできました。時にまっすぐに、時に迷いながらです。私の教会生活、洗礼も日常の中にありました。特に変わったこともない毎日の中に神さまはおられたのです。そして気づけば牧師に、大学や中高でキリスト教を教える先生になつていました。

人は愛されていることを知った時、前を向くことができます。神は皆さんを愛しておられます。それは今気づくかもしれないし、時間が経ってから気づくかもしれない。せん。何気ない日常を過ごしてい

く中で、多くの出会いが与えられていきます。どうぞ安心して、でも迷いながら、この時を歩んで行きますようにと願います。

(出席29名。文責・編集委員会。要約担当・市川義和)